



JAPANESE A1 – STANDARD LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1

Tuesday 18 November 2003 (afternoon)
Mardi 18 novembre 2003 (après-midi)
Martes 18 de noviembre de 2003 (tarde)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only. It is not compulsory for you to respond directly to the guiding questions provided. However, you may use them if you wish.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- Ne pas ouvrir cette épreuve avant d'y être autorisé.
- Rédiger un commentaire sur un seul des passages. Le commentaire ne doit pas nécessairement répondre aux questions d'orientation fournies. Vous pouvez toutefois les utiliser si vous le désirez.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento. No es obligatorio responder directamente a las preguntas que se ofrecen a modo de guía. Sin embargo, puede usarlas si lo desea.

次の 1 (a) の詩と (b) の文章のうち、どちらか一つを選んで解説しなさい。
(コメントリーを書きなさい)。

1 (a)

一個の人間

自分は一個の人間でありたい。

誰にも利用されない

誰にも頭をさげない

一個の人間でありたい。

5

他人を利用したり

他人をいびつにしたりしない

そのかわり自分もいびつにされない

一個の人間でありたい。

10

自分の最も深い泉から

最も新鮮な

生命の泉をくみとる

一個の人間でありたい。

15

誰もが見て

これでこそ人間だと思ふ

一個の人間でありたい。

一個の人間は

一個の人間でいいのではないか

一個の人間

○

20

独立人同志が

愛しあい、尊敬しあい、力をあわせる。

それは実に美しいことだ。

だが他人を利用して得をしようとするものは、いかに醜いか。

その醜さを本当に知るものが一個の人間。

(武者小路実篤、「一個の人間」、『無車詩集』、一九三六年、小学館)

- ― 詩人がいう「一個の人間」とはどのような人間ですか。
- ― この詩には反復が多いが、なぜですか。またそれはどのような効果をあげていますか。
- ― この「一個の人間」が呼び起こすイメージを通して、詩人は何を言おうとしていますか。
- ― あなたはこの詩を読んで「人間」というものについてどう考えますか。

(注) 武者小路実篤 (むしやのこうじ・さねあつ) (一八八五―一九七六) 小説家、劇作家、詩人。
東京生まれ。「白樺」創刊の中心的人物。小説『お目出たき人』や『友情』 戯曲『桃色の室』
エッセイ『「自己の為」及び其他について』などで知られている。

1 (b)

5 きょうから、あなたへの手紙を書きはじめることにしました。手紙といつても、この地上の誰に頼んでも、あなたのもともまで運んでもらうわけにはいかない手紙です。あなたが誰なのかも、私は知らない。しかも、あなたはおよそ千年も前にこの世を去っている。それでも、だからこそ、独り言に終わりかねないこの手紙が、一条の細い光のようにあなたの胸にすつと届いてくれそうな気がしてしまうのです。

10 一日毎に、なにかを食べ、排泄し、眠る。それだけの尺度でしか生きられない私たち人間には、千年は実感を伴なわない、あまりにも長すぎる時間ですが、あなたが今、いるところでは、一秒も、千年も、万年も、変わりはない。時間というものからは、もう解放されているはずのところなのですから。

15 また、生きている間のあなたに、私が何かの奇跡で会えたとしても、最早、同じ日本語とは言つても、互いの言葉が簡単に通じるとも思えません。でも、この世を去ったあなたへなら、そんな言葉の不自由さを感じずに、私は自分の時代の言葉で語りかけることができる。

20 自分に都合の良いことばかり、私は考えているのかもしれませんが。でも、あなたがこの世に書き残していった物語のことをいろいろ考えているうちに、ふと、あなたがどんな人だったのか分からなくても、とにかくある期間、この世に生き、そして死を迎えた人であることは間違いない、とこう言ってみると、そんなこと、子どもだって分かっていることだ、と笑われそうな自明のことになってしまうのですが、その自明のことを私ははじめて実感し、それからはあなたに私の思いを語りかけないでは、あなたの書いた物語について考えることもできないようになってきたのです。

25 あなたの物語は千年ものちにまで生き残っていた。それは今の世の私たちにとっては、幸運な偶然でした。でも、作者のあなたは物語と共に生き続けてきたわけではなかった。あなたの足跡は残ったけれど、生身のあなたは誰もが迎えなければならない平凡な事実である死を迎えたのです。

あなたは生き、そして死んだ。

30 肉体としてのみ見れば、生も死も、あなたの時代と千年後の私の時代とに変わりがあるはずはないのですが、生きている間に眼を向けると、着る服も違えば、住む家も違う。悩まされる病気も変わるし、娯楽も変わる。それで、感わされてしまうこともあるでしょうが、死ばかりはいくら感わされたくても感いようもなく、どんな時代、どんな国でも、なんら変わりがない。私の見知っている死と同じ死を、あなたも迎えた。決して、それは私の知らない死ではなかった。

こうして、私はあなたの死を身近な者の死に重ねて見届けてから、あなたの存在を生き生きと感ずるようになったのです。あなたに語りかけずにはいられなくなりました。

35 あなたの書き残した物語を、千年のちの世に生きている私たちは「夜の寢覚」、あるいは「夜半の寢覚」(注1)と呼び、読み継いでいます。中間と結末の部分との、全体のほぼ半分ほどの量が失われてしまっていて、完全な形で読むことができなくなっていますが、他に残されている歌集や、評論などで、大体の筋は迎えられるようになっています。(略)

40 千年後に生きている私たちは残された言葉、品物、絵画などで、人間の今までの一応の歴史は知らされています。(略)現在の私たちは多くの学者たちの研究によって、この世界が地球というひとつの丸い星の上に乗っていること、月は地球のまわりをまわっている自分では光らない小さな小さな星であること、(略)など、こういった途方もないようなことがすべて現実のことである、とも知らされています。(略)あなたの物語で大事な存在である月には、すでに空を飛ぶ乗り物で何人かの人間が行き着いてさえいます。

45 こうした知識まで常識として誰もが持つような時代が変わっています。けれども、それは知識だけのこと。私にはどうしたって、宇宙の広さどころか、地球が動く丸い玉であることすら、本当には納得できていない。いろいろ乗り物や機械は工夫されるようになっていますが、日常の生活では私たちも相変わらず、手を使い、足を使っています。その手も足も、あなたたちの時代と同じものです。一步一步足を動かす、その幅でしか、私たちも生きてはいないのです。青空は青空、雲は雲、月は月、としか、私たちだつて、

50 見えてはいません。月の光に見とれ、夕方の金色に輝く雲に、あの世のことを思います。

同様に、私たちは先のことを予想する力も持ち合わせてはいません。あと五十年はこの世界が続くだろう、と考える人は多い。あと百年、二百年のちの世を考えている人もいるのかもしれない。でも、さすがに千年となると、誰もが首を横に振ってしまう。

(津島佑子、「手紙」、『夜の光に追われて』一九八九年、講談社)

- この作品の主題は何だと思えますか。
- 作品での「私」が「あなた」へ宛てた手紙という形式は、どのような効果をもたらしていますか。
- 語り手の住む「現代」と手紙の宛先の「昔」とを比較し、類似点及び相違点について述べなさい。またそれによって、作者は何を言おうとしていますか。
- 昔の作品を読む意味や価値はあると思えますか。あると思う場合も、ないと思う場合も、その理由を述べなさい。

(注1)『夜の寢覚』平安後期の物語。菅原孝標の女の作といわれる。『源氏物語』の模倣と考えられ、寢覚の君の、悲恋を描いている。

津島佑子(つしま・ゆうこ)(一九四七-)小説家。太宰治の次女。『龍児』、『生き物の集まる家』、『光の領分』などの作品がある。